

## 「エゴ」が見えているということ

では、もし、「部下を動かす」という操作主義が過ちであるならば、我々マネジャーは、その操作主義を「捨てる」ことができるのでしょうか。

ここで、問題をもう少し正確に扱っておきましょう。

アドラーのところで述べたように、「自己の意のままに他者を動かしたい」という欲求は、人間にとって本源的な欲求であり、我々が静かに自らのこのころの世界を見つめるならば、誰しも何がしかの操作主義的な発想は抱いているのであり、何がしかの計算も働いているのです。

従って、ここで私が述べようとしているのは、「いかなる操作主義や計算も持つてはならない」という潔癖主義的なマネジメント論ではありません。

私が述べようとしているのは、「自分の内面にある操作主義や計算が見えているか」という内省的なマネジメント論なのです。

もとより、人間にとってこうした「エゴ」の問題は、「永遠の問い」とでも呼ぶべき深遠な問いです。

それは、独りアドラーだけでなく、釈尊やキリストを始めとして、歴史を振り返るならば多くの宗教家や思想家が生涯をかけて取り組んできた問題であり、なお答えの見い出せぬ問題なのです。

従って、ここで私が述べているのは、「己のエゴを捨てよ」というあまりに素朴かつ非現実的な議論ではありません。

私が述べているのは、「己のエゴが見えているか」ということなのです。

率直に言えば、どれほど「無私」や「無我」を論じてみても、我々が「エゴ」を捨てることは不可能です。

しかし、我々は「エゴ」を見つめることはできるのです。

そして、自分の内面にある「エゴ」を見つめ、その動きが見えていることは、それだけで、その「エゴ」が衝動的に活動することによってもたらされる破壊的な影響から、我々を救ってくれるのです。

そうした意味で、マネジャーは、自分のこころの世界にある操作主義の動きに気づいていなければなりません。